

陀_ノ仏_ト六_ト字_一。釈_レ成_{スル}決定往生義_ニ也

つまり三心領解すればその行は必然的に阿弥陀仏から離れることはないと言い。三心における願行が、念仏の願行に帰すると言うのである。このように諸行が念仏に帰するのである。ここで一つ特徴的なのは、証空は行具の三心とは正反対に心に正行が自ずから具足するという立場を『他筆鈔』巻上に述べている点である。

落_レ居_{スレハ}正_レ因_ノ道理_ニ正_レ行_ハ自_ラ具_也。正_レ因_ノ正_レ行_ハ不_レ離_レ法_{ナルカニ}故_也。而_レ所_レ云_正因_者三_心也

〔西全〕五、二九四下―五頁上

このように証空は領解の心を大切にし、どちらかと言えば法然の智具の三心を発展させたような論理展開をするのである。もちろん智具の三心とは三心の個々の心について解釈することを言っているのであって、領解の心とは異質なものである。しかし心に重心を置き、そこに行の重要性を見出すところに共通性が認められるのである。

第七項 平生と臨終の三心

次に証空の言う平生の三心・臨終の三心について検討してみたい。

証空は三心と三福の関係を核として平生の三心、臨終の三心を説く。これは臨終における来迎らいこうを得るためには平生の三心が重要であることを強調するがために説くものと考えられる。

『秘決集』卷十六によれば、

三心者名也。為念仏也。三福者体也。是来迎也。然平生三心具足臨終之来迎故。云三福正因。名体一位而不相捨離。

〔西全〕一、三四七頁下

以平生願感臨終来迎故也

〔西全〕一、三五頁

とある。このように平生に三心を具することは、いざ臨終というときに確実に来迎を得るためであるとする。それでは臨終まで三心を具せなかつた場合にはどうなるのであろうか。それに対する答は『他筆鈔』巻上にある（『西全』五、二九三頁上）。下三品とはそれぞれ行福、戒福、世福に対する罪である。したがって三福と三心が一体で三心の行が念仏であるから、臨終に念仏すればそれぞれの罪は滅することになるといふ論理である。

それを簡単に言い表した言葉が、

今発三心往生上品機也。若三心開發後。於所行之行。論堪不堪。下品

〔西全〕五、二九九頁上

下生者^{ノハ}。臨終一刹那^{シテニ}位三心開悟^{シテ}即往生^ス。

である。いずれにしても三心具さなければ往生はできないとし、臨終の一刹那であつても三心具して念仏すれば往生できるとするのである。

第八項 三心の一々とその関係

証空は、三心は領解の一心であると述べている。一心を開いて三心と言う。ここでは証空の考えている三心の一つひとつの心の役割について簡単にまとめてみたい。

至誠心についての証空の立場は、凡夫には真実心はないとするものである（『秘決集』卷第十六・『西全』一、三四九頁下）。その凡夫にない至誠心を証空は『蜜要決』卷第三に、『無量義経』を引いて説明する。

說^{クハ}四十余年未顕真実^ト者今至誠心也何以知真者詞誠也
是智惠誠也實者慈悲誠也此
真実^{ニハ}都無^テ諸教自力^ニ也慈悲智惠誠就^ハ他力^ニ也

〔『淨全』八、二八五頁上〕

さらに『秘決集』卷第十六に、